

郷土あれこれ

第26号

発行 あきる野市教育委員会 東京都あきる野市三宮350 電話 042-558-1111 FAX 042-558-1560

あきる野市の野鳥 その2

～秋から冬に観察できる鳥～

浦野守雄

(あきる野市自然環境調査部会委員)

はじめに

前号の郷土あれこれ25号では春から夏にかけて観察できる野鳥を紹介しました。今回は続編として、秋から冬に観察出来る野鳥を紹介します。

9月から10月にかけて夏鳥達が南へ帰ると、入れ替わりにシベリアなどの北方から冬鳥^{※1}が渡ってきます。また日本の中でも、北海道や高い山で繁殖を終え、餌の豊かな低地^{※2}に移動して冬を越す鳥達もいます。越冬中は地鳴きといわれる地味な声で仲間同士鳴き交わり、繁殖期のような美しいさえずりを聞くことはできません。しかし冬は木々の葉が落ちて鳥の姿が観察しやすく、餌を求めて庭先の柿の実や花などに色々な鳥が集まってくるので、野鳥を身近に観察できる季節です。

高い山から下りてくる美しい鳥

ルリビタキ



沢の縁に下りたルリビタキの雄

雄の成鳥は頭部から尾にかけて上面が青色、下面が白く胸と脇が橙黄色で美しく、雌は上面がオリー

ブ色で地味ですが、とても可愛いスズメくらいの鳥です。あきる野市内では山際の公園や雑木林で観察出来ます。子供の頃、飼っていたヤギの小屋に落ち葉を敷くため、よく雑木林の落ち葉かきを手伝いました。落ち葉をかき集めていると、地面の虫を狙ってすぐ近くまでルリビタキがよってきました。なんとか捕まえられないかと熊手を持って追いかけた思い出があります。冬の身近な鳥でした。

ウソ

夏は亜高山帯の林で繁殖し、秋から冬、里山に群で徐々に降りてきます。雄は頬と喉が紅色で体が灰色、頭と風切羽^{かざりばね}と尾が黒く、雌は頬の紅色がなくて雄に比べ茶色味が強い、スズメより少し大きなふっくらした鳥です。群で移動しながら草木



桜の冬芽を食べるウソ

の芽、種子、昆虫類などを食べています。桜の蕾^{つぼみ}など食べてしまうため、害鳥扱いされています。雌雄とも『フィ フィ』と口笛のような声で鳴き、名前のウソは嘘でなく口笛のことです。

- ※1 冬鳥 秋に日本より北の地域から渡ってきて日本で越冬し、春には北の地域に帰って繁殖する鳥。
- ※2 地鳴き さえずり以外の鳥の鳴き声。単純な『ピッ』『チッ』という声が多い。
- ※3 風切羽 翼の後縁にあって、飛ぶ時に風を切る長くて強い羽毛。

ベニマシコ



低木に止まるベニマシコ

雄は全体に紅色で、雌は淡黄褐色のスズメより小型の鳥です。林の縁や草やぶ、河川敷などを数羽で移動しながら草木の種子や冬芽などを食べています。

他にも漂鳥として、^{ひょうちよう※4} 亜高山帯の森林や高原からクロジやアオジなどが来て、ひっそりと春の訪れを待っています。

アオジ

雄は頭部が濃い灰緑色で喉から腹にかけて黄色で全体に黒い縦斑が入ります。雌は雄より淡い色で、スズメと同じくらいの鳥です。市内では河原のやぶや田畑の周辺の草地などで見られます。

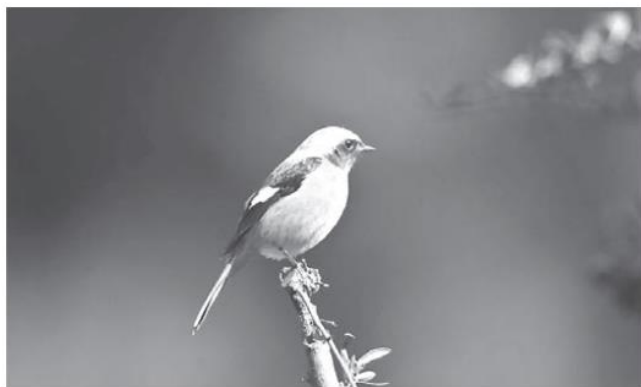


地上で餌を探すアオジ

大陸から渡ってくる冬鳥

ジョウビタキ

北方より渡ってくる冬鳥の代表です。雌雄とも1羽で縄張りを持ち、クモや昆虫類、柔らかな木の実などを食べていて、縄張りの中に他の個体が入ってくると追い払います。あきる野市の河原や農地、民家の周辺などで広く観察出来ます。昔から身近な冬鳥として『ヒッ カッカッ ヒッ カッカッ』とい



市街地の庭木に止まったジョウビタキの雄

う声でヒッカタ、雄の黒い翼にある白い紋を団子にみたててダンゴシヨイなどと呼ばれていました。

アトリ

アトリは大きな群れで山あいに行ってくるスズメに似た鳥です。草木の種子を採食します。渡ってきた頃は雌雄同じ色をしていますが、春先北方に帰る頃雄の頭が真っ黒に変わってきます。



群れで移動するアトリ

カシラダカ



梅の枝に止まるカシラダカ

カシラダカは留鳥^{りゅうちよう}のホオジロに似ていますが雄の頭の羽毛が立っているのがこの名前があります。

田畑や河川敷を歩いてスズメやホオジロが飛び立つ中に混ざっています。

ツグミ



雪の朝、庭に降り餌を探すツグミ

ヒヨドリくらいの大きさの冬鳥で、大きな群れで渡ってきてその後分散します。色は斑の茶褐色で個体差が大きいです。農地や河原、グランドなどに降りて、木の葉を裏返しながらミミズや昆虫などを探すが見られます。柔らかい実も食べ、庭先のカキノキにもきます。

※4 漂鳥 国内を季節移動する鳥。北海道で繁殖し、本州以南で越冬するものや、高地で繁殖し、低地で越冬するものなど。

キレンジャク・ヒレンジャク



尾の先が黄色いキレンジャク 尾の先が赤いヒレンジャク

北国から渡ってくる羽毛が美しい立派な冠羽かんろう※5を持った鳥です。群れで移動し、ヤドリギの実を食べ、その糞が高木の上に落ちて発芽します。ピラカンサやヤブラン、リュウノヒゲなどの実も食べ、よく水を飲みます。市内では春先の移動途中で見かけることが多く、その場所の餌を食べ尽くすとすぐ移動してしまうのでなかなか出会えない鳥です。レンジャクが飛来すると話題になり、多くのバードウォッチャーが集まります。

カキノキに集まる鳥達



熟した柿の実をついばむエナガ

最近では庭の柿の実をもがずにそのままにしている家が多く、枝先で熟した柿の実には多くの鳥達が集まります。

ツグミ、シロハラなどの冬鳥や、メジロ、ヒヨドリ、ウグイス、エナガ、アオゲラ、ムクドリ、オナガ、ハシブトガラス、ハシボソガラス、ヤマガラ、シジュウカラなど多くの留鳥も訪れ、双眼鏡なしで野鳥を観察出来るチャンスです。



上：メジロ
左：アオゲラ 下：ヒヨドリ



空高く舞う猛禽もうきん

クマタカ

留鳥で、翼を広げると140~165cmもある大型の猛禽です。あきる野市西部の山間部で観察される数の少ない貴重な鳥で、ノウサギやキジ、ヤマドリなどを捕らえます。猛禽類は生態系の頂点に位置する生物で、生息には豊かな森林が必要です。あきる野市だけでなく、隣接する市町村の良好な自然環境も大切です。



空を悠々と飛ぶクマタカ

※5 冠羽 鳥の頭にあつて、周りより長く伸びた羽毛。

オオタカ



モミ林に現われたオオタカ

成鳥の雄は青みがかった灰色の背面で腹部は白地に黒の横縞が入る美しいタカです。丘陵の代表的な猛禽で、鳩などを追って市街地の上空などに現れます。

チョウゲンボウやツミその他の猛禽

チョウゲンボウは農地、河川敷などで野ネズミやバッタなどの昆虫類を捕獲しています。市内では山田地区から下流の川や畑、秋川と多摩川の合流地域で一年中観察出来ます。冬は同じ科のハヤブサも少数見られます。ツミは一年中、ハイタカは冬、市街地から河川、山地にかけて見ることが出来ます。両方共小鳥類を捕らえます。



滑空するチョウゲンボウの雄



公園の林に現われたツミの雌

近年少なくなったカモ類

以前は冬になると、多摩川と秋川の合流付近でたくさんのカモの仲間を観察することが出来ました。カモは一般的に夜行性で日中安全な場所で羽を休め、夜餌を求めて活動します。以前猟をしていた方の話では夕方平井川に網を張って、朝にかけカモ類などを獲っていた時代もあったそうです。

オシドリは市内でも少数が繁殖していますが、冬期は上流部に群れが飛来し、ドングリ類などを食べ越冬しています。しかしその他のカモ類はマガモ・コガモ・オカヨシガモ・ヨシガモ・ヒドリガモ・オナガガモなどが少数飛来する程度です。



マガモ、ヒドリガモなどのカモ類の群れ

おわりに

近年観察出来る鳥の種類や個体数が減った原因として、渡り鳥の生息地の環境破壊が大きな原因として考えられていますが、日本も渡り鳥の繁殖地であり、越冬地でもあります。あきる野市は観光地として多くの人々が訪れる緑豊かな素晴らしいところです。しかしその緑がたくさんの生き物の生活を支えられる豊かな緑でなければ意味がありません。あきる野市も近年宅地化が進み、田畑や野原が減り、鳥にとって安心して過ごせる環境が減りつつあります。市民のみなさんも、普段の散策や市などで催される観察会やイベントなどに参加したりして、身近な自然の魅力を知るとともに、環境の変化にも気をとめてください。

参考文献

山溪ハンディ図鑑7 日本の野鳥 山と溪谷社
あきる野市自然環境調査報告 (平成21年度～平成23年度) あきる野市